2019年7月27日

老子会会報

老子会　主催
第019号

老子会のモットー

「老子の道の精神を生かし、自分を変え、世界を変え、未来を変え、世界平和を構築し、人類の幸福を推進していく」ことをモットーとする。

第63回老子会から

老子道徳経　第79章

原文

和大怨必有餘怨。安可以爲善。是以聖人執左契、而不責於人。有徳司契、無徳司徹。天道無親、常與善人。

書き下ろし文

大怨(たいえん)を和すれば必ず余怨(よえん)あり。安(いずく)んぞ以(も)って善と為(な)すべけんや。ここを以って聖人は左契(さけい)を執(と)りて、而(しか)も人を責めず。徳有るものは契(けい)を司(つかさど)り、徳無きものは徹(てつ)を司る。天道は親(しん)無し、常に善人に与(くみ)す。

現代語訳

深刻な怨みからくる争いを無理やり和解させても必ず火種がくすぶり続けるものだ。どうしてそれが善い事だと言えるだろうか。だからこそ「道」を知った聖人は、例え契約や法によって正義が自分にあっても相手を責めたりはしない。徳のある者は債券を管理するだけ、徳の無い者は無慈悲に取り立てを行うと言われる事である。天のやり方にはえこひいきが無く、いつも善人の味方をする。

解釈

正論や正義、あるいは法的な正当性というのは人の世では時に絶大な力を発揮する。しかしだからと言ってその力を振りかざして自分の権利ばかり主張していると大きな怨みを買ってしまう。法的な正当性については司法制度が整っている現代においては必要であれば主張して構わないと思うのであるが、人や時代や地域によって大きく判断の分かれる正論や正義を、数や力に頼ってごり押しするのはほとんど暴力といっても過言ではないであろう。

以前、拙者は三十章で「勝てば官軍」という言葉について少し話をしたのであるが、どんな争いにも必ず「落としどころ」というものがあるのである。武力を用いた戦争でさえ適切な落としどころがあるというのに、自らの正しさに頼って相手をどこまでも追い詰める事を傲慢といわずしてなんと言うのであろうか。

ただし、本章の最後の「天道は親無し、常に善人に与す」の部分は、第５章の「天地は仁ならず」など従来の老子の主張と少し矛盾するような気がするである。天がえこひいきをしないなら、善人の味方もしないはずだと拙者は思う次第である。

この部分については司馬遷も疑問に思ったらしく、史記の伯夷列伝のなかでこの言葉を引用し、仁者と讃えられた伯夷が山中で餓死したことや、孔子の弟子の中で最も優秀だった顔回が若くして死んだことなどを挙げて、「天道、是か非か(天の道は果たして正しいのであろうか、間違っているのであろうか)」と疑問を投げかけているのである。自身が正しい主張によって武帝の不興を買い、宮刑に処せられた司馬遷は天命というものに対して色々と思うところがあったのであろう。

第63回老子会から

解釈

深い怨みを和解させたとしても、必ず後まで怨みが残るんだ。和解は最善の方法とはいえないね。そういうワケだから、聖人は借人の契約書は握っていても、それで人に支払いを求めるようなことはしない。

だから、「徳」のある人は契約書を握るだけで、「徳」のない人は金の取り立てをするんだ。自然の道にえこひいきは無いし、いつでも善人の味方につくんだよ。つまり、権利を持っても、振りかざすな、と言うことを語っているのである。

人間はどう生きるべきか。自分が正義であるからといって、怒って相手に圧力を加えれば、相手の心に生じたわだかまりは和らげても後に尾を引く。相手に対して自分の主観に基づく正義とか善で圧力を加えれば、怨みを受ける。いささかの圧力を加えない生き方がいいのである。

たとえば債務者に対して債権者の優位な立場で圧力を加えると怨まれる。債権者の立場そのものが優位なのだから、債務者に対していささかも圧力を加えないようにすれば、怨らみを受けることがないのである。

徳のある人は自らの約束を守り、徳の無い人は相手に約束を守るようにあたかも税を取り立てるように圧力を加えるのである。

自然法則の原理は親しい人に対しても親しくない人に対しても区別しないでいささかの圧力も加えない。またすべての人を善人、悪人として区別しないですべて善人としていささかの圧力も加えないのである。圧力を加える生き方は作為になるから、いささかの圧力も加えない作為無き生き方がすばらしいのである。

老子の格言

第79章「**天道無親、常与善人**(天道に親（しん）無し、常に善人に与す」

意味：天の道はひいきをせず、善人の味方をするという格言である。

幸福のヒント

『老子』第79章（小川環樹・訳注）をヒントに考える“幸福の道”。

第79章「天道無親、常与善人」

「幸せの道に不公平はない。常に善い人に幸せを与える」

世の中には不公平なことはたくさんある。（客観的に）幸せな環境に生まれる人もいれば、（客観的に）不幸な環境に生まれる人もいる。人それぞれ、容姿も違えば、能力も違う。運のいい人もいれば、運の悪い人もいる。人によっては、選べない（人生の）道もある。

でも、幸せの道は広く、誰もが歩むことができるのである。そして、心に善く力を貸して、幸せになる心の働きを用いれば、それなりに幸せになれるのである。

不幸になる考え方をすれば不幸な気もちになり、幸せになる考え方（心を幸せ向きに変えられる考え方）をすれば、より幸せな気もちになれるのである。

幸せの道を極めることで「すべて“よし”」と思えるようになれれば、常に幸せでいられるようになるだろう。

つまり、自分の心の働きしだいで誰でも幸せになれるのである。むしろ、弱い人や不幸になりやすい人ほど、柔らかい心を身につけることで、幸せになれる幅が大きいとも言える。

そういう意味では、幸せな環境に生まれた人はすごく幸せになるのは難しい、とも考えられる。そういうことまで考えると、人が幸せになることに関しては、皆公平なのかもしれない。

幸せになる心の働きは自然に従うのである。自然の法則は誰にでも公平に働いているのではないでだろか。

老子道徳経　第80章

原文

小國寡民。使有什伯之器而不用、使民重死而不遠徙、雖有舟輿、無所乗之、雖有甲兵、無所陳之。使人復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、鄰國相望、雞犬之聲相聞、民至老死、不相往來。

老子道徳経　第80章

書き下ろし文

小国寡民(しょうこくかみん)。什伯(じゅうはく)の器(き)有るも而(しか)も用いざらしめ、民をして死を重んじて而して遠く徙(うつ)らざらしめば、舟輿(しゅうよ)有りと雖(いえど)も、これに乗る所無く、甲兵(こうへい)有りと雖も、これを陳(つら)ぬる所無からん。人をして復(ま)た縄を結びて而してこれを用いしめ、その食を甘(うま)しとし、その服を美とし、その居に安んじ、その俗を楽しましめば、隣国(りんごく)相い望み、雞犬(けいけん)の声相い聞こゆるも、民は老死に至るまで、相い往来(おうらい)せざらん。

現代語訳

人口の少ない小さな国がある。便利な道具があっても誰も使わず、人々は命を大切にして危険な遠出をしたりせず、船や車はあるが誰も乗らず、鎧(よろい)や武器はあるが誰も身に着けない。人々は昔ながらの素朴な暮らしを送り、その日の食事を美味しく食べ、着ている衣服を立派だと思い、自分の住居で安らかに暮らす。そんな暮らしを楽しんでいるので、隣の国がすぐ近くに見えて、その鶏や犬の鳴き声が聞こえるほどであっても、人々は老いて死ぬまで、お互いの国を行き交う事もない。これこそ人の世の理想郷である。

解釈

「井の中の蛙、大海を知らず」ということわざがある。この言葉は荘子の秋水篇にある言葉を原典としていて、現在では「狭い知識にとらわれずに大きな視野を持つべきだ」という様な教訓として使われるのであるが、井戸の中だけで十分に幸福であった蛙が海の広さを知った所で一体どうなるということであろうか。

蛙は海で生活はできないのだし、結局のところ満ち足りていたはずの井戸の中の暮らしが前より色あせるだけである。同じようなことを思った人がいたのか、いつのまにかこの言葉の後ろに「されど空の高さを知る」と原典には無い言葉が付け足される事もしばしばである。

老子の生きた時代は戦乱の時代であるから、小国は大国にのみこまれ、その大国も生き残りをかけて富国強兵に努めなければならない時代であった。なにやらグローバル化がすすみ国家間の経済競争が熾烈を極める昨今の世界情勢と似ているような気がしないでもないであるが、そこで単なる理想だと決め付けて思考を止めてしまうこともないであろう。

なにより老子の言うような理想郷に近い生活を実現できるのが、互いの価値観の相違を認めるはずの自由民主国家よりも、愚民政策をとる全体主義の独裁国家だなんてことになったらあまりにも悔しい。国家全体のあり方としては無理でも、足るを知る生活を求める人が自分の暮らし方を選択する自由はあってしかるべきであろう。

ちなみに中国で理想郷を指す言葉として有名な「桃源郷」というのは、六朝時代に活躍した詩人・陶淵明(とうえんめい)の桃花源記という詩に登場する架空の村が出典である。陶淵明は官を辞して晴耕雨読の生活を続けるなかで玄学的な詩を書き綴り、桃花源記も老子の思想に影響を受けて書かれたといわれているのである。

ことわざ

小国寡民(しょうこくかみん)

意味：国土が小さく、人口が少ないこと。小さな国であるということ。

老子が、国家の理想像や社会形態の理想として説いた。「寡」は少ないという意味である。

分かりやすく

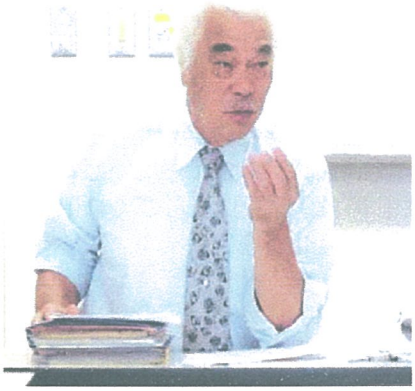
老子が「理想像」として描いていた社会の様子が描かれている。

この章が**『小国寡民の章』**と呼ばれていることからもわかるように、その理想像とは、「小さくて」「住民の少ない」国。決して、強い勢力を持つ大国ではなかったということである。

なぜ老子がそのような小国寡民を理想としていたかと言えば、**老子自身が生きていた時代が、それとは真逆の世の中だったからである。**

老子が生きていたと考えられている時代は、いわゆる「戦国の世」。諸侯たちはこぞって、相手国を倒して自国の領土を広げようとしていた。兵を増やして、戦いの効率化を図ろうとしていた時代だったのである。

老子会の『人』小野　順一さん



小野順一さんは、京都府宇治市出身。地域の名家に、3人兄弟の次男坊として生まれました。「本家・分家」の名残が色濃い時代で「お爺ちゃん子」として育ちます。おかげで、明治天皇の近衛だったお爺ちゃんから、いくつも「武勇伝」を聞くことができました。「長男は超優等生、自分は超劣等生」と仰いますが、熱心なお母様の励ましで京都の府立高校に進学しました。その後も努力を続け通信教育に挑戦。法政大学の法律学部を卒業します。

「仕事はいっぱいした。」とのことで、日産自動車の営業を始め、運送業、貿易、映画関連、自動車のリサイクルなど多岐にわたります。現在は「小野商事」を経営、幅広い事業を展開されています。

また、映画美術監督として活躍され、国際映画人倶楽部のプロデューサーとして、ハリウッドなど海外制作会社とのコネクションをもち、自動車を通じて、中国政府関係者ともお付き合いがあります。

地元でも中学校の同窓会会長として、本年の交代まで35年間尽力されています。紙面の関係で紹介できませんが、他にも多数の公職、理事職をされています。

「これといった趣味を持たず、ゴルフもマージャンんもやらないのが自慢。」と語る小野さんですが、行動力は抜群、過去には「衆議院議員選挙」に出馬されたこともあります。

胡先生を知人から紹介されたのを機に、「バカボンのパパが教えてくれる老子」を知り、勉強会に参加するようになりました。「老子が仕向けたのか」と不思議な縁を感じていらっしゃいます。

「間違った事に立ち向かう時『真実の翼』が飛ぶ。」が信念の小野さん、経験豊富で今後も懇親会での対話が楽しみです。

（余保充徳）

＜老子会の皆さんへ＞

カルガモの親子を見て「自分なりに強く生きる」と思いましたが、ヨチヨチ歩く子どものカルガモ、「狙われたら一番最後を歩く子が、最初に餌食にされてしまう。」と思い、そんな生き方は避けないとと思っています。すばらしい出会いに感謝。志ざしを同じくする学友にあえた事に感謝しています。皆さん有難うございます。

（小野順一）

事務局からの「第６４回老子会」のご報告

６月は、初めて中之島公会堂で開催しました。２５名が出席。“井の中の蛙大海を知らず”の新たな解釈を学びました。小さな殻に閉じこもらず視野を広げる重要性を理解していましたが、もっと深い意味がありました。交流会は「アウェイ」にて親睦を深め合いました。メニューは飲み放題も含め、フレンチ＆イタリアンで参加者も大満足でした。今月で全８１章を修了します。６年間の学習に出席頂き有難うございました。８月は老子会総会で、６年間の総括と今後の方針を発表いたします。暑さ厳しい折柄、熱中症など皆さまくれぐれもご自愛ください。

石井　政　事務局長

【今後の日程】

８月３１日（土）１７時　道頓堀ホテル　　第２回老子会総会

老　子　会

〒658-8502
神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学　国際言語文化センター　胡金定研究室

電話: 078(435)2353
携帯番号:090-9169-2820(事務局長)
FAX: 078(435)2545
E-mail　kokintei@konan-u.ac.jp